

東郷 敏

出逢い（その一）

○からの出発

成寿春季号（二十卷）にて、波乱万丈に富んだ大圓和尚さまの、『明日に生きる』を楽しく、とても、おかしく壮快感さえ感じながら、一気に読ませていただきました。昭和四十年、△○からの出発▽成寿山善光寺開創のころに、おもいを馳せ、当時青春真直中の先生が、既に、時を変え、処を変えては、遠大な将来の夢を高らかに、お話ししておいでございました。人並みでない新しい思想と、新しい時代の、新しい布教の在り方に着目して、新しい寺を興したい、必ずや、寺をおこすんだと、発願利生（註）、いかにも、城でも築く意気であり、活力に充ちた、その頃の黒田武志先生を、想い出しております。若武者二十

発願利生（修證義第四章）
佛心を発し、佛心に生き、佛心の光明

と慈悲とに生きるこ
と。世の為人の為に(ま
ず自分ではなく、まず
人に)よかれと念願す
ることが菩提心(佛
心)。一旦、決心し、計
画し、誓い、約束した
以上は、それを全うす
る。

六歳の、輝ける青年僧であります。
それ迄、私は、先生の生い立ちや、
生れ育った環境を全く知る由もな
く、何を言うておいでなのか、寺
というものは、古く、代々と続い
てこそ△名刹▽の所以であり、い
まどき新しい寺をつくるなど、考
えも及びませんでした。

先生は、いつでも一方的にご自
分のお考えを吐露されるのであり
ます。曰く、私はここに百年の計
を建てたい。一宗一派にとらわれ
ず、ただあと始末だけするような
寺はいらない(単に葬式や法事な
ど)。これからは、世界に広く人を
求め、これからの青年達に未来を
託せる様な、人材育成の場をつく
りたい。そして自分の手であらゆ



1965年総持寺にて

る分野の、あらゆる人たちにチャンスを与え、世界の舞台に送り出し、世界観のある人を育てたい。そして、普く人心の救済をしたいなど、承りますれば、なるほど御説ご尤も、事あるごとにですから、私にしてみれば「一体、寺とは何ぞや」、とても凡人の私に考えられるようなことではなかった。当時あまりに遠大な構想に、唯々戸惑うばかりでございました。

なにせその頃から、地球規模のお話でありますから、ハアハアと笑いながら聞くより術がなかったのです。この先生、話しているうちに、どんな夢がふくらんでゆくよううで、何時間話しても、おさまらなくなってしまう。私は先生を見ていて、どうしてこんなに、単純明快でわかりやすいご性格なのか、なのはどうして思うことを、思うようにつくり上げてゆかれるのか、不思議で仕方がない。また、人の何十倍も気性が激しく、まるで野武士みたいに見えるのに、二人で相對しているとき、いつの間にか仙人みたいに枯れて見えてくるから不思議だ。ほんとうに若いのか、年寄りなのか、つかみどころがない。いいかえれば真実ありのままの御方なのかもしれない。いつでも無私の姿勢が貫かれており、全く私心私欲の無いところが、人をひきつける、大きな根源ではなからうかなどと、思ったりもする。それでいて、先生はいつでも、何に對しても真剣だから、お話ししていて、気が抜けそうで気が抜けず、私は困りました。こうして翻って、いま善光寺の足跡を觀れば一目瞭然、三十年前に、先生

が謂いつづけ、念じ続けておいでだったことが、いつの間にか、その通り、違えず、確実に、実行、実現しておいでなのでありますから、先生にしてみれば、何の不思議もなく、あたり前のことなかもしれません。先生は唯、天に課せられたご自分の道を約束通り、歩いておいでになったのかもしれない。しかも、人が歩いた道ではない、いつでも他人のマネをせず、創造的に、夢と理想に燃えて、ご自分の力で歩いて行かれる、そんな先生を観ていると、チャンスというものは、準備していた心に幸いしている様に思えてくる。そして今日もまた、限りなく△可能性への挑戦▽をしておいでなのである。この△可能性▽というものは、可能にするための努力を一生懸命しているもののみ与えられる特権なのかもしれない。いよいよ以て笑いごとではなかったようです。

無一文の私

善光寺育英会海外派遣留学僧も、すでに五十名を超えようとしている。これらの方々が、世界各地に学び活躍なさっている偉業は、一介の寺の成せる業ではない。しかも国籍、民族、性別、職業、宗派を問わずであるから、先生の大無辺の思想と御人格が伺われてならない。

(生を明らめ、死を明らかにするは) 佛家一大事の因縁(修證義第一章)

道元禪師の謂われる、まこと『佛家一大事の因縁』(註)か、先生は立派なご両親と立派な御兄弟に抱かれながら、いわゆる△清貧の思想▽ではありません

真実に生き、価値ある人生として生きる。死すべく生まれてくる人間の一生。こんなことを教わる環境を得る因縁（内因外縁）。

疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とす（樂しみ其の中に在り）（述而第七一五）粗末なものを食べ、水を飲み、肱を曲げて枕がわりとするような、極めて貧しい境遇の中にあつて、道を志す楽しみは、自ずからその中にある。

が、簡素で風雅な環境で成長され、或る時は仕方なく、又或る時は自ら求めて、苦勞に苦勞、修行に修行を積み重ね、その失敗だらけの青年期に、「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦」と日本の津々浦々に一年有余も托鉢行脚し、論語の一説を借りるなら、『疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とし』（註）ながら、道に志し、又各本山での修行は幾多にも及ぶ、並をはるかに超えた修行中の御方。相對しているや、小さな会社の、あまりに小さな営業マン。日夜利潤追及に目をむき出して勤しんでいるわたくし。水と油、世界の異う先生との方向を簡単に共有するなど、難しいことでありました。

さて、少しづつ実現への道は開かれていたのでございましょうか、先生は語気も弾んで「どうするか、どうしよう。何をするにも、ある程度先立つものがある。さてとなれば△無一文の私▽いつも、何時もどうしたらよいか、私は考えている」と申され、顔をジーツと見つめて、お話しをされるのでありますから実に、破戒力と説得力があります。

「東郷さん、私の願いは、宗派にとらわれてしまふ様な日本の、枝葉の仏教ではなく、真の仏教を学びとるところにある。だからとて、決して、枝葉を軽んずるといふことではない。就中、幹が尊く、大地に這う、根と幹がなければ枝葉の生命はない。従つて、限りなく△宗祖を通して 釈尊に還る▽ことが、私に課せられた使命なんです。

山に登らばすべからく頂に到れ、海に入らばすべからく底に到れ：(永平広録) 山に登るならば必ず頂上、海なら底。そうでないといふ深い浅い(宇宙の広さ)が分からない。

故きを温ねて新しきを知る(以て師となすべし)(為政第二―二―)
古い事実をたずね究めて、そこから将来の新しい道を導き知ることが出来る。

述べて作らず、信じて古を好む(述而第七―一―) 古人の残したものに於いて考へを述べることはあつても、自分古道を固く信じ、深く古道を好んで、新しいものを作るものではない。

道元禪師はネエ、『山に登らばすべからく頂に到れ、海に入らばすべからく底に到れ、山に登り頂に到らざらんは、宇宙の寛宏を知らざらん、海に入りて底に到らざらんには、滄溟の浅深を知らざらん』(註)と教えてある。高さも、広さも、深さも、そこに行かねば、其処に立たねば、そこに坐らねばわからんのです。やがて、私はインドを訪ねます。そして、さらに、さらに、いろいろな国に、その佛跡を訪ね、お釈迦さまが、二千五百年前に、何を説かれたか、その歴史をも、この体で、肌で感じとつて、初めて仏教というものが、私に親しみ、私の血となり肉となつて、この真理を体現して、ようやく、釈尊の、仏教の真髓を、説く資格が私に得られると思つて居るのです。私の新しい創造は、論語の『故きを温ねて新しきを知る』(註)の道理に合致し、さらに『述べて作らず、信じて古を好む』(註)人間から発していると思つています』とおっしゃる。先生のお話しはいつでも、原典から説かれますから、難しいのです。特に私にはです。

新しい寺づくり

先生は、なお続けて、「私は決して、新規の説を作るなどということとは、毛頭考へて居る訳ではありません。こここのところは、間違いがあつてはなりません。確認しておきますよ。やがて、求めているものをこの手でしっかりと掴み、私

の思うこと、考えていることを堅固にした上で、私の信念に基き、これを具体化するために、その拠点となる、新しい△寺づくり▽をやりたいのです。道元禪師ではありませんが、それこそ『自己の自己にてある、模索におよばず』の言に従うて、取り組みたいと思っています。そんな、こんな考えていると、私には、残された時間が、あまりにも微い。限られた私の人生の中で△何がやれるか▽たとえ一歩でも、少しでも、実現するためにはどうしても、急がねばならないのですよ。わかってくれますか」

どうもこの先生は、話す相手を取り違えておいでのようで、私は応えられない相手ではない。頼れる相手でもない。しかしそれをよく承知の上で、自分を盡し、自分を推しておいでのになる。対応力の乏しい私は、いつも、台風の吹き過ぎるのを待つしかない。ああ、ようやく通り過ぎたな、と気を抜いてしまっていると、やがて吹き戻しがある。いつの間にか、私は分かった様な顔をして、合槌を打ってしまったっている。理解できない自分が恥かしいとも思うのか、自分を繕ってしまったっている。これが誤解のもとであり、やがて段々と本気になって、深みに入りこんでしまいます。

この延長線上に、先立つ根源である先代社長があることを、言わず、語らず、認識し共有していることは、誰よりも、二人がよく承知しておりました。私は応える力と知恵はなくとも、先生のこの大志を、なんとか叶えてあげられる

方法はないものかと、思い詰めてしまつて、識らず、知らずのうちに、立場を超えて、共有できる様になつていたことを思い出します。しかし誰だつて、やりたくて出来ないのが、人間の常ではありません。また思う方向の逆に運ばれてしまうのも、どうしようもない人の常であります。どうもこの御方には、それがない。

先生は、初めから、ご自分の中にキツチリと整理されたものがあり、その用意と準備は、見事整つていたのでございましょう。どうして、あの若さで、あの夢が描けたのか。私には、全くわかりません。おそらく、生まれ育つた環境と、あらゆる難行苦行のご体験と、幅広い、素晴らしい人脈に起因すること確かな様でございます。

しかし所詮、夢だけで、お腹がいっぱいになるはずがございせん。そのころ、お会いするときまつて、異常な空腹感に襲われるのは、何だったのか。そしていつの間にか、私の先代（のち開基）や現社長を介して、先生との結び目は、大きくなり固くなり、いよいよ先生の話術と魔術と情熱と溢れる人間味に翻弄されて行くのであります。ここらあたりは、何とも適当なことばで表現しにくいのでありますが、言い知れぬ、先生の人間的魅力にとりつかれながら、時は大きく動いて行くことを観じないわけには参りませんでした。兎角一時もジーツと静止しない、くろだぶし衛星でありますから、電波は、とき、ところ

構わず、どんどん飛び込んでくる、知る人ぞ知る、在り方、御方であります。さて、話が前後してしまいました、少し始めに戻ります。

はじめての参禅

昭和三十九年の夏、会社の「幹部社員教育」ということで、横浜・総持寺の夏季撰心会に、先代社長（のち開基）に連れられ、七名程、参禅致しました。先代をはじめ、現社長共々、誰一人として、経験のない者ばかりでしたから、その時のことを思い出しますと、今でも身が震える思いが致します。ここらあたりは、黒田先生と、私どもの葛藤と闘いの、大事な部分と心得ますので、少し、くわしく述べさせていただきます。

私は自分で求めて入山したわけではありません。会社で置かれた立場上、給料のため、ボーナスのためにと仕方なく参禅している有様でございましたから、不遜とは思いますが、始めから、心を陶冶するとか、少しでも、自分を高めるとかいう気持はなく、参禅に期待するものは、出発する前から失せておりました。従って逃げ腰であり、何とか、うまく時間を過せば、それで充分と心得て、ただ坐るだけで、事足りると思っておりました。どんな処でも大概、逃げ場所がありうまく隠れる場所がある、そんな処を必ずや、発見できるものと安心して臨んだつもりでした。でもこの世界は、勝手が違い面食らってしまいました。

1964年 7月



過去、経験したことも想像したことも全くない、異様な世界であることを知るまでに、ほんの僅かでしたが、やがて骨の髄まで思い知らされてしまいました。私が発見した、逃げて、隠れる場所は、何処も精鋭の闇魔さまがいっぱい駐屯しており、私はすっかり観念してしまいました。会社にとっても、当時、幹部社員が、七名も留守することは、経営上危険をとまなう大冒険。この年、会社も創業三十周年を迎え働き盛りでした。折しも戦後が終り、日本中が、東京オリンピック開催景気で、沸き返っており、国鉄自慢の東海道新幹線開業、さらに名神高速道路開通も、この年であり、日本が時間的に急に縮まって、何か大きな時代の流れと、経済成長も国際間競争力を増しながら、著しい変革をもたらしておりました。会社も変わらず、時代の波に乗り、経営環境も、にわかには明るく、大幅な増収増益と目を見張るものがあつたようです。それだけに、また、社員も急増し大事な社員教育が追いつかず、そのころ一夜仕立ての一人代表社員が闊歩し始めたことも、先代社長にとっては悩みでもあり、会社が飛躍する喜びよりも、むしろ社

員教育が、おろそかになる事を憂慮していることはよく承知しておりました。それだけに、先代社長は社内では、勿論のこと、どうしたら、幹部社員、管理者を、厳しくできるか、あちこちに教育の場を探し、此処もその一つであったようです。

この撰心会に期するところも、少なからずあることを、私も慮って、しっかりと取組まねば天罰があたると、やゝ反省しながら、いよいよ坐ることになりました。しかし、慣れた御方は何でもない事と思いますが、私は人一倍躰が固く、思うように坐れない。ただ坐るだけなのに、それができない。生半跣坐だと言われた。それでさえも、覚束ないのでありますから、五日間を過すということは、先代を慮つたにしても地獄の底でした。

それでも一日一日と坐り続けるわけですが、求められる、感謝報恩の気持ちどころではありません。坐が進むごとに、誓いとは程遠く、不平不満愚痴の蟠る姿勢でありますから、さぞ御指導の雲水方も、私に憐れみを、観じられたことでございましょう。精も根もつきるころ、私共を引率した先代も、率先垂範せねばならぬたてまえ、引くに引けず、随分参っておいででした。とき六十五歳の先代社長でした。

先代も、辛さを共有され、痛いなあ、ガンバレやア、わしも痛い^が頂上が見えたぞ、がんばろう、と、今にも頼りない私共が、この寺を飛び出しかねない

様子を見て取った、先代精一杯の声援とへおもいやりVだったのでございましょう。

葛藤と闘い

さて、私は入山以来、参禅中どうにも許せない、一人の雲水を、ハッキリ、見届けておりました。私共は、捕われの身。如何せん、この場では、手も足も口も出せないダルマさん。数ある雲水の中で、飛び抜けて、厳しく、少しの油断も許さず、見逃さず、続けざまの指導と警策はズッシリと、食い込んでくる始末。身を削り、骨を砕く様な入れ方と、堂を真一つに割る様な、大声で叫ぶ。「コラッたるんどる！」はまだいい方で、「貴さま死ぬエッ！」とくるから、思わず、躰が天井に吹きあがってしまう。この雲水、教えるのではなく、ドナリ散らすようなあり方に、私はいつの間にか見えない背後の敵と、相対しているような、変な気概が起っていることに気付きませんでした。何処に持っているいきようもない、苛立たしく、遣瀬無い気持ち、何やらこの雲水に一点集中してしまい、必ずや、仕返しをしてやらねばと終り近づくにつれて、あきらかに、この雲水と、戦闘状態に這入っておりました。これまで一度でも何らかの経験があれば一種の気合いと、思うたのでありましょうが、環境が環境だけに、この理性なき輩、血気盛んな年頃だけに、本気で闘っているのですから危い



(何を四悪と謂ふ。)教へずして殺す、之を虐と謂ふ(堯日第二十二) 人を教育せず罪を犯したからといって殺すのを虐、平素の戒めをせず俄かに出来るようになれば殺すというて出来ねば殺すのを暴、命令をゆるやかにして期限を嚴重にせめたてるのを賊、与えねばならぬものを出し洩る、いかにもケチを小役人根性、これを四悪と謂ふ。

参禅は身心脱落なり。身に所作なく、心に思量なし。(不思量にして現じ、不回流にして成ず)(洞谷記・瑩山禅師語録)

ものでございます。

参禅会での教え方は、一度限り、最大効率を狙って、実に簡単明瞭、しかし作法ルールの濃やかさ、メンタルなもの含めて非常に難しく、一度や二度でわかる様なものではありません。黙って坐れば、全て、解決というわけには参りません。孔子の『教へずして殺す、之を虐と謂ふ』(註)、多分、会社や職場でも同じような過ちをしているのでありましょう。つくづく反省させられました。雲水方も、きつと教えたつもり、わかっていくれるつもりであったことと思います。如何せん積極的に受け入れようとする私の△素直さ▽がないのでありますから、わかり易い佛教の教えを、わかりづらく、親しみにくくしてしまったこと、私自信に原因すること否めません。初めから、坐る動機、目的が明らかに間違っておりました。人に知られるための坐禅であり、自分の修養のための学問でなかったことが悔やまれます。従って坐っていても、形はあれど姿がない。姿はあれど心が無い。何とも情けないこと、恥かしいことこの上ありません。瑩山禅師は『参禅は身心脱落なり。身に所作なく、心に思量なし』(註)と教えてくださいました。これまでの、心の迷いや、とらわれ束縛されている、自分を解放して身も心も、おだやかさを取り戻すことである。これを身心脱落という。しかもそこでは、もはや、右往左往した心も行動も表現もなく、小賢しい考えなど一切生じないものだ。と、喝破しておいでございま

す。私は、あべこべでありますから、どうにもなりません。後にも先にもこのような不心得を持ったことは、全くありません。

まことに往生際の悪い参禅者となってしまいました。お陰さまで、私の葛藤と闘いゆえに、いくらか痛みも分散し、ようやくどうにか打ち上げの太鼓を聞くことができました。その瞬間、大声上げてそこら中、走り回りたい訳わからぬ、感動を押さえることができませんでした。

のち、先代社長の述懐に「自分も三日目ぐらいまでは、死んだほうがよいと思うほど辛かった。四日目ごろへやれるVという自信がついた時は、うれし涙が止まらなかつた。これは一生忘れることはないと思う」(昭和39年・成寿ゆり11号)と書き残しておられます。「また社員が警策でたたかれる時は、自分がたたかれるよりは、十倍もつらかつた。また坐が終るごとに、元気で頑張っている顔を見ると、自分のこと以上にうれしかつた」と、残しております。私はこんな先代の御気持など知ろうとする、余裕が全くありませんでした。

先生との出会い

さて、闘い終って、解放され、間もなくお互いさま、ホツとした気持で、思いの感想を述べあっておりました。その時、異口同音やっぱり一人の雲水について、大なり、小なり、尋常でない感情が残っております。先代にこの

愛語、利行、同事（修
證義第四章）

之を愛しては、能く勞
せしむること勿らん
や。焉に忠ありては、
能く誨ふること勿らん
や（憲問第十四―七）
愛するならば、その人
の為に苦勞を厭わず出
来るだけのことをして
勉めないでいられよう
か。忠実であるならば、
そのことについて知ら
ない人に教えないでい
られようか。ただ可愛
がることだけが愛の本
質ではない。

ことを言いますと、全く、自分の耳を疑ってしまいました。この雲水について、正反対の見方と評価であり、状況は一変してしまいました。あの雲水こそ、わしが探し求めていた御方であり、あの御方のお陰で此処に参禅した甲斐があった。あの雲水こそ、まこと特別な御方である。この参禅中、わしはあの雲水の一挙手一投足、一言一句、見続けてきた。あの御方の教え方こそ、△愛語、利行、同事▽（註）ではないか。論語の中にも『之を愛しては、能く勞せしむること勿からんや。焉に忠ありては、能く誨ふること勿からんや』（註）とある。真に人に苦勞をさせることのできる人、これは愛の人である。もしも、人に間違いがあり、それを見て見ない振りをせず、直視して、直してあげ、正してあげられる、忠言をもつ人、これは△まこと▽の人である。また同じく『言を知らざれば、以て人を知ることなし』（註）とある。人の吐く言葉は、その人の心の表現であり、その人の全人格を現わしている。……お前は、それがわからんのかとでも言う様に、ジーツと私の目を見据えて、人を見抜くことのできないことに、とても悲しんでいる様子でした。

「なあ、心するがよい。人を叱る、人をたたく、人に厳しくできるは、並の心掛けと修行でできるものではない。人の為を思う（For others）と、こういふは、その人に余程な愛情と△おもいやり▽がなければできぬこと。あの御方にはそれができるのだ。偉いイツ！」この時、先代の目に光るものがあつた。今にも



こぼれ落ちそうな大粒であった。嗚呼！己
んぬるかな、此奴め、何の泪か知る由もあり
ません。「キミたちイ！ 何とも素晴らしい御方
ぞ！」

ただ、しばし沈黙でした。私は返す言葉が
ありません。冷たい水を、頭の上からザブー
ツと、ぶっかけられたような衝撃を受けてし
まいました。憎い憎い、悪い悪いと思うてい
た人が突然、大恩人に変ってしまふ。何とも、
悲しい心を持ってしまったもんだ。どうした
らよかろう。後悔が先になつ。あの時の反省
ほど私にとって複雑で難しいものはありませ
んでした。学ぶことの乏しかった自己中心の
哀れな姿、大恩人を極悪人と、取り違えてし
まったこの愚者。こんな気持で山を下りられ
たものではない。しかし、なぜか同時に、価
値ある五日間が蘇り、あたりがパーと開け
てきて、新しい自分に巡り会えたような気が

してならなかった。何とも言えぬ感動であった。

私はしゃくりながら、帰り支度をしていると、突然、ドドツと、私共の部屋に飛び込んできた一人の雲水。「ヤア皆様どうもどうもお疲れさまでございまして。みなさんヨク頑張られました。どうぞ気をつけてお帰りください。また、ドウゾ、どうぞ」ですから、耳にこびりついた、あの懐しい声であります。何とも、言いようのない、一時でした。

先ほどのショックが覚めやらぬ時、タイミングよく、よくも飛び込んでおいでになったもんだ、葛藤半ばにして、自分をコントロールできないまま——「先生ッ、△悟り▽とは何ですか！」「エッ」と発するなり矢庭にドツカとあぐらかいて、坊主頭を搔きながら、「悟りですかア、アツハツハー、悟りですか。△悟り▽がわかれば、私は、此処にはおりませんヨ。よろしいですかア」

こんな応えが方があっていいのでしょうか。呆氣にとられてしまいました。ほのぼのとした空気があたりを払い、ふあーと聖者が駆け抜けたような心地、なんと素晴らしい響きなんだろう。底抜けに明るく、天真爛漫、何と温もり溢れる人間味。この新鮮な感動に、躰が震えてしまいました。

この雲水、先代が言われるように、素晴らしい輝きを放つ。一体この雲水のもつ、この美しさの根源は、何なんだろう。摂心も終り、雲水の皆さんも後始末に忙しかろうに、わざわざ山の頂上の奥の奥、私共の部屋まで上ってきて、労

佛種縁による 佛果を生ずる因種（菩薩の所行は縁による）

（子は）温にして勵し、威あつて猛からず、恭しくして安し（述而第七—37） 孔子の弟子が先生の態度風貌を言うたところ：

つてくださる、この雲水。『佛種縁による』（註）とはこのことか。実に頼りない返事ではあつたが、いかにも禅問答的である。沸騰するような共感を覚える。一緒なんだなアー、同じ所に立っておいでなんだ。のち読んだ論語の中にその時の雲水をダブラしてしまいました。『温おんにして厲はげし、威いあつて猛たけからず、恭しくして安し』（註）いかにも、おだやかではあるが、その中におのずから、引き締まったところがあり、自然に具った威厳はあるが、かといって威張おごつたところがない。またうやうやしく慎み深い窮屈きうくつな所が全くない、いかにもゆつくり、ゆつたりとしている：先ほど先代の言われた、一挙手一投足、一言一句を思い出す、見事な振る舞いである。ついさっきまで、チツトも変らない、私の目、耳なのに掌返してこんなにも見方、心変りできるものか。私は、すっかりこの雲水に一体感を観じてしまった。この雲水こそ、若き日の黒田先生であり、私共にとって生涯忘れ得ぬ、熱き出会いであつた。

株式会社ナリス化粧品勤務